

## IBL学習法の看護学概論への適用

松成 裕子<sup>1</sup>・横尾 誠一<sup>1</sup>・花田 裕子<sup>1</sup>・野村亜由美<sup>1</sup>  
宮原 春美<sup>1</sup>・楠葉 洋子<sup>1</sup>・河村 靖子<sup>1</sup>・濱野 香苗<sup>1</sup>

**要旨** 本学保健学科看護学専攻の1年次科目の「看護学概論」にIBLによる学習法を取り入れた。IBLを担当する教員の準備から、学習の経過に至るまでをまとめ、学生の反応や意見からその実施を振り返ることと、IBL実施における今後の課題が明確となった。

保健学研究 23(1): 17-24, 2011

**Key Words** : 看護教育・チュートリアル教育・IBL学習法・看護学概論

(2010年10月13日受付)  
(2010年12月7日受理)

## I. はじめに

近年では、学習者中心の教授法や実施が求められ、チュートリアル教育もその一つである。チュートリアルは、チューター（個別指導教員）による少人数教育のことを意味する。形態にはセミナー、学生生活の個別指導、PBL（Problem Based Learning, 以下PBL）チュートリアル、IBL（Inquiry Based Learning, 以下IBL）がある<sup>1)</sup>。IBLは、少人数グループの単位の学習指導プロセス（チュートリアル）を採用し、実例に基づいた症例設定を用いるというPBLの原理原則を踏襲している。しかし、PBLは、黒板を使った従来の講義方法と設問スタイルが残され<sup>2)</sup>、与えられた情報から問題を明確化していくことに重点がおかれている。それに対し、IBLは、仮説を立て、それを立証するための方策を学習することを目的にしており<sup>3)</sup>、このことからIBLは、「柔軟性があり、かつ開放的で、チューターと学生との多様な能力や資源を引き出す学習方式として位置づけ」られている<sup>2)</sup>。1990年代にハワイ大学で始められ、三重県立看護大学でも行われてきている<sup>3)</sup>。

臨床の現場において看護師は、専門職としての多大な知識や技術が要求され、基礎教育における看護実践能力の育成が求められる。そのために基礎教育の段階から批判的思考、分析的問題解決、臨床的推論、意思決定の能力の習得<sup>4)</sup>がなされなければならない。IBLは事例に関するグループ討論を行い、グループの学習、課題を明確にし、各人の課題に対する分担学習、グループでの課題、学習発表を通し、グループで成長していくこと、また討論や発表を通して批判的思考力の養成をねらいとしている<sup>5)</sup>。

今回、本学保健学科看護学専攻の1年次の看護学概論の科目にIBLによる学習法を取り入れた。この取り組みについて、IBLを担当する教員の準備から、学習の経過

に至るまでをまとめ、学生の反応や意見からその実施を振り返った。そして、今後の課題について報告する。

## II. 本学におけるIBL学習の位置づけ

本学保健学科看護学専攻では、新カリキュラムの改正に伴い、基礎看護学、成人看護学、老年看護学、精神看護学、小児看護学、母性看護学の各概論の内容を統合した「看護学概論」の科目が設けられた。科目単位数は、60時間2単位で一年次に履修する。科目のねらいは、看護学の基礎概念である人間、環境、健康、看護の概要と構造について学習し、専門職としての看護の役割の重要性を認識し、「看護学」に対する基礎的理解と展望を明確にする。そして、ライフサイクルに沿った対象理解について、身体および心理社会的発達、家族・社会・地域の中で生活している家族・個人として捉えるように教授する。科目の概要は、看護の歴史、健康とは何か、看護の対象とは何か、環境とは何か、看護とは何か、看護の役割とは何かについて、講義並びにチュートリアル方式の学習方法で学び、専門職として看護の重要性を認識することとしている。チュートリアルIBL学習法は、事例をもとにグループ討論を行い、グループ学習、発表を通し、グループで成長し、批判的思考力の養成することをねらいとしている。平成21年度から開始し、本年度で2度目の実施となる。また、学生は3年次には「看護の統合と発展」科目として、再度IBL学習法による授業を経験することになっている。

### 1. IBLの準備

#### 1) IBL担当者会議

IBL担当者会議は、基礎看護学、成人看護学、老年看護学、精神看護学、小児看護学、母性看護学の各概論の担当教員で構成した。看護学概論の科目の位置づけ、内

1 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻

容、構成の検討を行った。

## 2) IBL準備委員会の実施内容

IBL実施に向けての準備委員会を発足した。準備委員には、基礎看護学4名、成人看護学1名、精神看護学1名、母子看護学1名の計7名の教員が選出された。

まず、準備委員会は、実施までのタイムスケジュール、各委員の役割が確認され、本年度のIBL実施の計画が決定した(表1)。

次に、準備委員会は、実施計画に基づき、本年度のIBLの目標および事例の状況設定、事例のねらいと資源を協議、決定し、事例作成委員を選出した。事例作成委員は、先に議論されたIBLの目標、事例の状況設定、ねらいを網羅し、資源の活用ができる内容の事例(案)を作成した。事例(案)は、準備委員会で繰り返し検討した後、「事例のまとめ」として完成した。次に、「キーワード」と各「パート」を決め、「ガイディングクエスト」を作成した(表2)。

また、チューターマニュアルおよび学生ガイドブックは、見やすく、読みやすく、興味を抱きやすいように修正した。評価表については、年次比較を懸念することから、修正を見合わせた。準備期間は6ヶ月を要した。

## 3) IBLシミュレーションの実施

IBLシミュレーションは、チューター担当教員が役割を明確化し、グループ運営がスムーズに行われる目的で実施した。そして、学生役のボランティアは教員から募り、参加教員とは事前打ち合わせを行なった。また、保

健学科教員に公開し、本番同様に進行した。シミュレーションを学内で公開することで、経験のない教員がチューターを担当しても、グループ運営がスムーズにいくように配慮した。参加したボランティア教員のIBLの進行や事例に対する意見や気づいた点などの感想からIBLの進行、事例を見直した。

## 2. IBLの実施

### 1) オリエンテーション

IBL実施委員長が学生にガイドブックを用いてIBLの目的や概要を説明した。次に、スケジュールである進行表(表3)を示し、学生が自主的に準備、活動できるように役割、実施方法について周知を促した。

### 2) 具体的な展開(表3)

オリエンテーションの後、パート1, 2を実施した。司会、書記、時計係をグループの中から決定後、パート1を開始した。パート1は、提供された事例情報をもとに、事例に関する「事実」、重要事項が生じたことの推論「仮説」、仮説を検証するための「必要な情報」が話し合われた。続いて、「調べる項目」では、重要事項、仮説、必要な情報で不明な点が話し合われた。パート2でも同じように「事実」、「仮説」、「必要な情報」、「調べる項目」を実施した。最初は、学生の自主的な意見が出にくい傾向であったが、パート2へ進むと学生も徐々に慣れ、学習活動が起動に乗ってきた。パート1, 2の実施後は、グループ毎に「今日の振り返り」が行われた。

表1. 平成22年度IBL実施の計画

日付	内容	備考
平成21年12月3日	IBL担当者会議 IBLの目標設定・ケースの状況設定	
平成21年12月17日	IBL担当者会議 ねらい・資源などの作成	ケース作成者決定
平成22年1月6日	IBL担当者会議 ケース検討	
平成22年1月21日	IBL担当者会議 ケース検討	
平成22年2月4日	IBL担当者会議 事例のパート作成	
平成22年2月18日	IBL担当者会議 チューターガイドの見直し 評価表の見直し	
平成22年3月4日	IBL担当者会議 全体の計画修正	
平成22年3月19日	IBL担当者会議 シミュレーション準備	
平成22年4月8日	IBL担当者会議 シミュレーション説明会	
平成22年4月16日	IBLシミュレーション	終了後、事例、全体的な修正などについての会議
平成22年7月6日	IBL担当者会議	最終配布資料の確認と役割分担
平成22年7月15日	IBLシミュレーション	公開シミュレーション
平成22年7月20日	IBL実施日3, 4時限	実施後30分程度の状況報告・反省会
平成22年7月27日	IBL実施日3, 4時限	実施後30分程度の状況報告・反省会
平成22年8月3日	IBL実施日3, 4時限	実施後反省会および評価のすり合わせ等
平成22年8月3日	IBL担当者会議 IBLのまとめ	評価会議
	次年度引継ぎ会議	

表2. 看護学概論 事例のTutor Guides

<p><b>Topic:</b> 第二の人生だあー</p> <p><b>Learning Objective</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 地域の中で生活している対象を考えることができる。</li> <li>2. 生活している中で生じる個人と家族の変化を関連させて考えることができる。</li> <li>3. 対象を身体的、心理社会的な側面から考えることができる。</li> </ol> <p><b>Resources</b></p> <p>人：家族、親戚、近隣の人々、教員、学生  施設：図書館（本・論文・資料・インターネット）、大学、市役所、県庁</p> <p><b>Key Word:</b> 家族、地域特性、身体の年齢的变化、心理社会的発達課題</p> <p>事例：パート1 身体・健康  岩永一朗さんは、61歳の男性です。持病に「腰椎すべり症」があります。夏に行われる精霊流しの精霊船作成に熱心に取り組んでいます。</p> <p><b>Guiding Questions (Key Words: 身体的特徴・健康・年齢)</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 岩永さんの健康状態はどのようなものでしょうか。</li> <li>2. 岩永さんの心理社会的発達はどのようなものでしょうか。</li> <li>3. 岩永さんの持病は、生活にどのような影響があるでしょうか。</li> </ol> <p>パート2 個人と家族の変化による影響  岩永一朗さんは、昨年、定年退職しました。妻は専業主婦で55歳です。現在、2人暮らしです。東京に住む長男は26歳で結婚予定であり、次男は大学を卒業して福岡県内に就職しました。</p> <p><b>Guiding Questions (Key Words: 家族・夫婦・役割)</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 岩永さんが定年退職したことにより、家庭の中でどのような変化があったでしょうか。</li> <li>2. 子どもが自立することにより、家族の生活にどのような変化があるでしょうか。</li> </ol> <p>パート3 心理社会・発達課題を踏まえ、地域で生きる対象  岩永さんが住む地区は、古い歴史のある地域です。岩永さんの誇りでもありました。今年初めて地域の精霊船製作グループに入り、腰痛を我慢して毎日取り組んでいました。精霊流し当日に起き上がることができなくなり、医師より「自宅安静」といわれました。</p> <p><b>Guiding Questions (Key Words: 人と地域社会・自分らしさ)</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 岩永さんにとっての地域との関わりはどのようなものでしょうか。</li> <li>2. 岩永さんは、なぜ、腰痛を我慢して精霊船作成に参加し続けたのでしょうか。</li> </ol> <p><b>事例のまとめ</b>  岩永一朗さんは61歳の男性です。昨年3月に定年退職となり、長崎市内の自宅55才の妻と二人暮らしです。妻は1日おきに隣町でひとり暮らしの実父の家事の手伝いをしに行っています。岩永さん夫婦には2人の子どもがいます。26歳の長男は東京の区役所に勤務しており、今年の10月に東京で結婚式を行う予定です。22歳の次男は昨年の3月に大学を卒業し、福岡の銀行に就職しました。</p> <p>岩永さんは退職前から「退職後は、次男も就職したので働かなくても個人年金と退職金で食べていけるから、のんびり夫婦で過ごそう。」と妻と話し合っていました。岩永さんは、退職前から町内の運動会や「長崎くんち」等に積極的に参加していました。岩永さんの住んでいる町は、古い歴史のある町で長崎でも「長崎くんち」「精霊流し」等の年中行事に熱心に取り組む地域であるため、退職を機に地域に貢献をしたいと思っていました。妻も人と接するのが好きな人柄で町内での餅つきや夏祭り、運動会などのボランティアに積極的に参加しています。岩永さんは健康診断を受けて正常でした。</p> <p>5月下旬に町内会長から電話があり、町内会役員をやってほしいという内容でした。岩永さんは喜んで精霊流し役員を引き受けました。岩永さんは正義感が強く、祭り事も好きでしたのでやりがいを感じ、妻に毎日のように「今年の精霊流しを見に来てほしい」と話していました。</p> <p>7月末になると精霊船の作成が始まりました。岩永さんの住む町では精霊流しは町民が一致団結する年に一度の大きな行事です。8月になって雨のために精霊船作成が予定通りに進まず、岩永さんには精霊流しの役員としての不安と焦りがあり、一人遅くまで作成していました。また連日の精霊船作成の疲れから、毎晩のように肩や腰の痛みを感じていました。妻からは「もともと腰も悪いし、長男の結婚式もあるので、無理をしないでほしい」と言われていましたが、日も迫っており、精霊流しを成功させたいという気持ちで、肩や腰に湿布を貼ったり、妻からマッサージをしてもらったりしながら町内の人たちと一緒に精霊船の作成に頑張っていました。</p> <p>しかし8月15日精霊流しの朝、岩永さんの腰に激痛が走り、歩行するのが困難な状態となって、かかりつけの病院を受診しました。医師から「腰椎すべり症の悪化」と診断され、「今日の精霊流しは参加しないで、安静にしておくように」と言われました。岩永さんはしばらくうつむいていましたが、医師へ精霊流しに参加しないことを伝えました。病院から自宅へ戻ると岩永さんは、元気がなく、表情も暗く、食事も摂らずに寝室で布団の中に入っていました。夜になりTVで精霊流しの映像が流れていることを妻が知らせると、寝室から出てきて精霊流しの映像をみていました。その夜、精霊流しを終えた町内会の人たちが岩永さんの自宅を訪問してくれました。岩永さんは、町内会の人たちの精霊流しの報告と岩永さんに対する労いの言葉を聴いていました。長男からは「弟が父さん達と一緒に結婚式に行くようにしたからね・・・」と心配の電話がありました。岩永さんの「腰椎すべり症」は3週間程で回復しました。今は長男の結婚式と結婚式の際に次男に会えることを楽しみにして、妻との穏やかな日々を送っています。</p>
---

活動報告

表3. IBLスケジュール

7月20日 IV限目：パート1, 2

12:50～13:30まで オリエンテーション 終了後チューターは、準備ができているか、声を掛ける					
時間	司会	書記	時計係	メンバー	チューター
13:40	IBLの進め方を確認しながら、司会、書記、時計係を決める			部屋の準備 用紙を張る	事前に部屋の準備確認し、出欠席を取る
13:45	チューターからケースのパート1をもらう				事例パート1紙を配る 司会に開始合図をする
	「どなたかこのケースを 声に出して読んでくれま せんか」 「〇〇さんお願いします」				
	「ありがとうございます た。では、事実を挙げて いきましょう」	模造紙に縦4列に 「事実」「仮説」 「必要な情報」「調 べる項目」の枠を 書く	時間配分を決め、 メンバーに提案す る		各係が役割を果し、滞ることな く進行できているか、確認し、 促す
			パート1:「13時 50分まで、5分間 です」 パート2:「14時 45分まで、5分間 です」		
		模造紙の「事実」 の項に、メンバー から出た意見をそ のまま書く		どんどんアイデア を浮かべ、考え、 意見を出す	事実の発表時間は、必ずしも5 分間取る必要はない
13:50	時間係が時間を告げたら、 意見が出尽くしてい なくても、次の「仮説」 に進む		「時間です」		
	「ここまで出た事実から 考えられる仮説を述べて 下さい」		パート1:「次は 14時00分までで す」 パート2:「次は 14時55分までで す」	事実から何が言え るのかを考え、自 分の意見を述べる	事実または仮説の段階で、guid- ing questionが示す内容が出て いない場合は、問いかける。
		「仮説」の項に書 く			
	Ex. 「もっと考えられる 仮説はありませんか」				仮説は疑問文でとせず、仮説表 現(主題文)にするよう促す
14:00	「この仮説を検証するた めに必要な情報を挙げて 下さい」  Ex. 「他に必要な情報は 何でしょうか」	「必要な情報」の 項に書く	「時間です」  パート1:「次は 14時10分までで す」 パート2:「次は 15時05分までで す」	仮説の検証のため に必要な情報は何 かを考え、自分の 意見を述べる	「事実」、「仮説」で出た内容で も、「必要な情報」また「調 べる項目」に挙がってこないこと もある、調べる内容を深めるよ うにguiding questionにて促す
14:10	「今までのところで、よ く分からないことなど、 調べる項目としましよ う。それでは挙げて下さ い」	「調べる項目」に 書く	「時間です」	調べる項目は何か を考えて述べる	
			パート1:「次は 14時20分までで す」 パート2:「次は 15時15分までで す」		
14:20	「それではこれで、パー ト1は終わりにしましよ う」		「時間です」		
	コーヒープレイク				

活動報告

14:40 ↓ 15:15	*パート1と同様に、パート2を35分で行う パート2:14:40~15:15				
15:15	「調べる項目を分担しましょう」	調べる項目に、調べる人を書く		積極的に引き受ける パート1・2の調べる項目を分担する	「調べる項目」について、何から、どのように調べたらよいか等のヒントを提供する
15:30	「それでは、今日の振り返りをしましょう」「自分自身の反省点、メンバーの良かった点など、評価し合いましょう」			素直に自分自身を振り返り、グループメンバーの良い点、良い意見「あの時のあの意見が良かった」などを素直に表現する	
15:40	調べる項目をどのようにメンバーに提供するか、次週の共有のための発表の方法、必要物品を持ってくる人など決める				自己評価表配布
15:50	5分間で、評価表の記入を行う				教員評価を付ける
15:55	終了				自己評価表回収

7月27日 Ⅲ限目：パート3

時間	司会(ファシリテーター)	書記(レコーダー)	時計係(タイムキーパー)	メンバー	チューター	
12:50	今日の進め方を確認しながら、司会、書記、時計係を決める				パート1の用紙を張る	自己評価表返却
12:55 ↓ 13:15	先週決めた方法に従って、各人が調べてきた項目の発表を行い、グループ内で共有する					
13:15 ↓ 13:50	前回と同様に、パート3を35分で行う パート2:13:15~13:50			パート2の用紙を張る	用紙張替えの確認	
13:50	「調べる項目を分担しましょう」	調べる項目に、調べる人を書く		積極的に引き受ける パート2の調べる項目を分担する		
14:00	「それでは、今日の振り返りをしましょう」「自分自身の反省点、メンバーの良かった点など、評価し合いましょう」					
14:05	調べる項目をどのようにメンバーに提供するか、次週の共有のための発表の方法、必要物品を持ってくる人など決める				自己評価表配布	
14:10	5分間で、評価表の記入を行う				教員評価を付ける	
14:15	終了				自己評価表回収	

\*パート1・2の模造紙を貼って、調べる項目の発表を行う

7月27日 Ⅳ限目：発表準備

指定した室に発表会係が集合し、プログラムを作る その他のメンバーは発表会に向けた準備を行う

8月3日 Ⅲ限目：調べた項目の発表・検討

時間	司会	書記	時計係	メンバー	チューター
12:50	今日の進め方を確認しながら、司会、書記、時計係を決める パート3の模造紙を貼り、各自は転記した資料を準備する				開始前に事例のまとめ、自己評価表の配布
12:55 ↓ 13:15	先週決めた方法に従って、各人が調べてきた項目の発表を行い、グループ内で共有する				
13:15 ↓ 14:00	事例のまとめ：調べてきた内容を、事例と関連させながら考える				教員評価を付け、自己評価、ピア評価回収

\*パート1~3の模造紙を貼って、調べる項目の発表を行うため、必要物品は8月3日も準備する

8月3日 Ⅳ限目：全体発表 \*発表は1グループ10分間

表4. 平成22年度 学生による授業評価集計結果

n = 68

	全くそう思わない	そうは思わない	どちらともいえない	そう思う	強くそう思う
1) IBLの説明はよくわかった	1 (1.5%)	3 (4.4%)	9 (13.2%)	40 (58.8%)	15 (22.1%)
2) 大学の授業を受けた感じがする	0 (0%)	2 (2.9%)	10 (14.7%)	32 (47.1%)	24 (35.3%)
3) 知識が身につかなかった※	18 (26.5%)	39 (57.4%)	5 (7.4%)	5 (7.4%)	1 (1.5%)
4) チューターは思考を高める役割を果たしたか	0 (0%)	3 (4.4%)	1 (1.5%)	40 (58.8%)	24 (35.3%)
5) チューターは学生の反応をみていない※	28 (41.2%)	33 (48.5%)	6 (8.8%)	1 (1.5%)	0 (0%)
6) 安心感がある	0 (0%)	5 (7.4%)	8 (11.8%)	46 (67.6%)	9 (13.2%)
7) どのように進めてよいかわからなかった※	8 (11.8%)	28 (41.2%)	17 (25.0%)	14 (20.6%)	1 (1.5%)
8) 肯定的な刺激を受けた	0 (0%)	1 (1.5%)	2 (2.9%)	36 (52.9%)	29 (42.7%)
9) このチューターからもっと学びたい	1 (1.5%)	0 (0%)	12 (17.6%)	34 (50.0%)	21 (30.9%)
10) グループ内の学生と共同できた	0 (0%)	1 (1.5%)	3 (4.4%)	25 (36.8%)	39 (57.4%)
11) 学生数は妥当である	0 (0%)	3 (4.4%)	2 (2.9%)	28 (41.2%)	35 (51.5%)
12) この授業を新1年生にも薦めたい	0 (0%)	0 (0%)	5 (7.4%)	31 (45.6%)	32 (47.1%)
13) 考える力がついた	0 (0%)	1 (1.5%)	1 (1.5%)	34 (50.0%)	32 (47.0%)
14) この授業は興味あるものであった	0 (0%)	2 (2.9%)	3 (4.4%)	31 (45.6%)	32 (47.1%)
15) 自分で調べる力がついた	0 (0%)	2 (2.9%)	4 (5.9%)	27 (40.0%)	35 (51.5%)
16) この方法では学習意欲が湧いてこない※	24 (35.3%)	31 (45.6%)	4 (5.9%)	4 (5.9%)	5 (7.4%)

反目項目は※を付けている。

これによって、学生個人の今日の学習の効果、グループへの貢献度、グループとしての学び、役割のとり方、自身の主体性・自発性の振り返りを行い、次回に活かした。この際、チューターは学生が学習の指針となるように、個々の良い点を認め、努力する点を伝え、学習意欲を高めるような刺激となるコメントを送った。その後、学生はグループ間で、それぞれに調べる項目を割り当てた。各自、その項目を調べ、パート3の開始前に、その項目を発表した。この際、チューターは、学生がもう一度事例に戻って考えられるように方向づけ、「調べる項目」でわかったことから、各パートの事例情報の関係性を明らかにするように支持を行った。パート1、2と同様にパート3を実施し、終了した。

### 3) 全体発表会

各グループから1名の全体発表会係を選出した。教員は、全体発表会へ向けて、学生達が主体的に準備し、全体発表会の運営方法や内容を決定するように働きかけた。全体発表会は、学生の主体的運営にまかせた。チューターは、グループの発表内容や発表態度、方法について評価した。そして、既習の看護理論や知識が統合され、各成長発達段階の知識が積み上げられるように助言を行った。

## 3. IBLの評価

### 1) 評価の方法

各パートの「今日のふりかえり」が終了して、学生はグループ学習における自分の行動を評価表の内容項目に沿って評価した。評価表は、学生のIBL時間における参

加度と、その後に行うグループワークのプロセスにおける活躍度に分けた。担当教員は、学生が評価表を記入後、回収し、教員評価と学生自己評価に乖離がないか等を確認して、次回までに個々に指導を行った。また、学生間で行うピア評価は、最終時の評価の1回のみ、全体発表の評価は、発表会最後に評価した。

チューターの評価点は、教員間で偏りが生じないように、担当者間で評価基準を打ち合わせた。チューターの評価点、学生の自己評価点、ピア評価点を集計し、看護学概論の成績におけるIBLの配分点内で、IBLの評価点を算出した。

### 2) 学生評価の結果

学生のIBL学習後の評価を表4に示す。IBL学習について、学生は主体的学習法を経験することによって、肯定的な刺激を受け、主体的学習への動機付けがなされたことが示された。また、1年次の学生であることから、高校までの能動的学習法との違いから、自ら学ぶことの楽しさを感じる感想が聞かれた。そして、グループの学生の意見を聞くことによって、自分と異なる意見や視点を知り、その相互作用の中から学ぶことを経験していた。また、チュートリアル学習の短所としてもあげられている「学ぶことの量が少なく感じる」が示された。

### 3) 教員評価の結果

IBL実施終了後、チューター会議を開催し、各グループの実施状況を報告した。教員の感想や問題点などが協議され、次回の指導につなげるものとした。

また、全ての学習活動が終了した後は、次年度の担

当者に申し送りがなされる。この時には、問題点や検討課題等が報告されることになっている。

### Ⅲ. IBLの総評と今後の課題

本学の看護学概論におけるIBLの取り組みのメリットは、学習後の評価（表4）から、学生は主体的学習法の経験から肯定的な刺激を受け、学習の動機付けになったと考える。これまでの能動的学習法との違い、自分と異なる意見や視点の発見は、相互作用から学ぶことの楽しさを実感することになり、自己の成長の自覚として、「調べる力、考える力がついた」ことにもつながった。

教員側の問題点としては、発言の少ない学生をあまり理解できないままにIBLが終了したことが挙げられた。これは、教員のチューター能力に関わることであり、教員自身が自らの課題を明確にし、研鑽していく必要がある。

また、システムの問題点として、準備委員会の発足やIBLの実施までの準備に要する時間が膨大であることが明らかになった。このようなことから早急に全員がIBLの教育に携われる教育体制を整える必要がある。

評価については、IBL実施前後に教員間の評価基準の申し合わせを行い、偏りのないように努めた。また、IBL欠席者の評価の取り扱い、看護学概論におけるIBLの評価配分等についての細則の設定が必要であることが明確となった。

課題としては、各領域の担当教員間の連携や継続的なチュートリアル教育への取り組みへの対応等である。し

かしながら、効果が期待できるだけに継続して学生の変化を捉え、教員間の共通認識のもとに対応していくことが望まれる。これらはIBLの教員経験者も増え、教員間における情報交換を有効に活かし、継続的なチュートリアル教育が実践できるように取り組み、3年次の「看護の統合と発展」科目における実施に向けても積極的に検討していく必要がある。

### 引用文献

- 1) 中柳美恵子：IBL (Inquiry Based Learning) 研修での学びから。看護学統合研究, 2 (1) : 67-70, 2000.
- 2) Jillian Inouye : PBLとIBL, 日本の看護教育についての文献研究. Quality Nursing, 5 (10) : 59-65, 1999.
- 3) 赤澤千春, 林優子 : IBL (Inquiry Based Learning) 演習法を活用した急性期成人看護学演習方法について. 京都大学医学部保健学科紀要健康科学, 4 : 45-46, 2007.
- 4) Rosalinda Alfaro-LeFevre : Critical Thinking in Nursing, 1995, 江本愛子監訳 : アルファロ看護場面のクリティカルシンキング. 医学書院, 東京, 1996 : 45-51,
- 5) 玉城清子, 賀数いづみ, 井上松代, 西平朋子, 加藤尚美, 園生陽子 : IBLによる褥婦・新生児の学習-助産コース専攻学生への応用-. 沖縄県立看護大学紀要, 4 : 74-78, 2003.

# Applying Inquiry Based Learning method on studying Introduction to Nursing

Yuko MATSUNARI<sup>1</sup>, Seiichi YOKOO<sup>1</sup>, Hiroko HANADA<sup>1</sup>, Ayumi NOMURA<sup>1</sup>  
Harumi MIYAHARA<sup>1</sup>, Yoko KUSUBA<sup>1</sup>, Yasuko KAWAMURA<sup>1</sup>, Kanae HAMANO<sup>1</sup>

<sup>1</sup> Department of Nursing, Graduate School of Biomedical Sciences, Nagasaki University

Received 13 October 2010

Accepted 7 December 2010